

展覧会企画担当より

本展にて展示している作品は 1971 年の絵画教室が始まった当時から洛南病院にて保管されていたものだ。それらは、現在は使われていない病棟の空き部屋にて段ボールに入り、深く閉ざされ眠りについていた。展覧会開催にあたり、膨大な数の作品を段ボールごと借用し、埃をはらいながら開封していった。作品、1 点 1 点と対面していく中で、当時の患者さんたちの様子を垣間見ることができた。古くは 50 年前に描かれた作品のどれも、作者の心のままに描かれていることが伝わってきて、絵画教室が、いかに彼らにとって安全な場所であったかを物語っていた。

現在、洛南病院は大規模な改修工事中で、作品を保管している病棟もいすれ取り壊されることとなっており、その際にこれらの作品は全て行き場をなくしてしまうことになる。絵画教室を始めた 1971 年から現在まで、様々な出来事があり、時の流れとともに変わっていったことも多くあったと思う。新しい景色が、より良いものになっていくことは素晴らしいことだ。ただ、どうしても寂しく思ってしまうのは、過去が遠のいてしまうことだ。行き場をなくしてしまう、この膨大な作品は遠い過去のものではあるが、現在を生きる私の心をくすぐってくれている。

生前の山崎氏がよく語っていた「いつか障害を持った人の作品を集めた美術館が創られたら素晴らしい」の言葉を、そのまま叶えることは出来ないが、本展覧会が彼の夢の一端を少しでも担えたのならば、とても嬉しい。



作品を保管している部屋
 2023 年 10 月 art space co-jin 撮影

参考文献：

山崎俊生『親のない天才たち＜父・子信交＞と＜母・子信交＞の世界』ルガール社、1987 年
 山崎俊生『中学・高校生向けの礼拝説教集』ルガール社、2020 年
 山崎俊生『父と刀―心の表現と人間の理解―』ルガール社、2006 年
 山崎俊生『救いの瞬間―みことばによる癒しの世界―』ルガール社、1993 年
 山崎俊生『画集 心象の世界 Images of the Inner World』ルガール社、1996 年
 山崎照恵『キリスト教保育にたずさわる感性』ルガール社、2007 年
 「松浦茂晴教授遺稿・追悼集」編集委員会『にもかかわらず―松浦茂晴教授遺稿・追悼集』四国学院大学教育学科、ルガール社、1986 年

引用：

- ★1 親のない天才たち＜父・子信交＞と＜母・子信交＞の世界 247-249 頁
- ★2 中学・高校生向けの礼拝説教集 115-116 頁
- ★3 中学・高校生向けの礼拝説教集 115 頁
- ★4 中学・高校生向けの礼拝説教集 116 頁
- ★5 親のない天才たち 253 頁
- ★6 中学・高校生向けの礼拝説教集 116-119 頁
- ★7 父と刀―心の表現と人間の理解―38-44 頁
- ★8 にもかかわらず―松浦茂晴教授遺稿・追悼集 223-229 頁
- ★9 父と刀―心の表現と人間の理解― 8-9 頁
- ★10 にもかかわらず―松浦茂晴教授遺稿・追悼集 225 頁
- ★11 父と刀 一心の表現と人間の理解―12 頁
- ★12 画集 心象の世界 Images of the Inner World 77 頁
- ★13 父と刀 一心の表現と人間の理解―17 頁

山崎俊生と心象の世界
 ルガール
 2024 年 1 月 16 日（火）― 3 月 24 日（日）
 10:00 ― 18:00 月曜定休・入場無料
 REGARD
 YAMASAKI Toshio
 and Images of the Inner World

art space co-jin

3 | 心象展について

絵画教室が始まってから数ヶ月たった時に、作品を人に見てもらう機会があればと、当時はまだ木造だった洛南病院のロビーに、ありあわせの額縁で額装した作品 10 点ほどを飾ることになった。すると、それまでは仄暗かったロビーが明るくなり、作品を観た他の患者さんや医師や職員などから、作者の隠された才能に驚いたと良い反響があった。^{★12}そして、絵画教室が始まってから 10 年がたった 1981 年、山崎の一般の人達にも見てもらえる機会を設けたいという強い想いと、画廊と一べえの協力を得て「第 1 回心象展」を開催し 32 点の作品を展示した。

その当時、画廊と一べえは京都市内中心部の三条寺町にあり、関係者だけではなく通りすがりに立ち寄る来廊者もいた。山崎と絵画教室を担当している職員が入れ替わりで当番をし、来廊者には「宇治市に洛南病院という精神科の病院があるのですが、そこの患者さんたちの作品です」と紹介をしていた。来廊者たちの多くは静かにじっくりと作品を観て、中には精神科に暗いイメージを持っていたが意外と明るい絵が多いと感想を述べる人もいた。また、作者である患者さんの親族が来廊することもあり、作家本人よりも家族の方が嬉しくてたまらないといった様子で喜んでいる姿もあった。開催は、最初の 3 年間は毎年、その後は 2 年おとし、2011 年の第 17 回まで続いた心象展は、回を重ねるごとに来廊者も増えていき、開催のたびに参加者 OB・OG や関係者の小さな同窓会のような場ともなった。



画廊と一べえ外観 1981 年 7 月



第 1 回心象展 展示風景 1981 年 7 月

4 | 『画集 心象の世界』について

絵画教室が始まってから 25 年目の 1996 年には、それまでに制作された作品は 7,000 点を超えており、段ボールに仕舞われたままになっていることに、患者から作品がもったいないとの声があがっていた。山崎はより多くの方に作品を観てもらう機会をと『画集 心象の世界』をルガル社より出版した。出版にあたり、まず 7000 点の作品の中から選定を行い、掲載する作家への許諾をとっていった。転院をしている方の元にも絵画教室担当の職員と共に出向き丁寧に許諾をとり、差し支えのある方はイニシャル表記にするなど細やかに対応をしていった。作品の撮影は山崎自ら行い、出来上がった画集は、作品の色彩がきれいに印刷され、見応えのある作品が 108 点納められた。また、その出版資金は発刊の 2 年前に 44 歳で癌のために惜しくも亡くなった絵画教室の参加者が、ご兄弟に「自分の遺産のうちから、みんなの画集の出版のために援助してほしい」と遺言を残していたことにより得たものだった。^{★13}



1 | 山崎俊生の生涯

1940 年 9 月 20 日、高知県宿毛市の映画館を営む家庭に山崎俊生は生まれた。厳しい父親は家を不在にすることが多く、少年時代の山崎は、心温かく子供思いな母親に育てられた。母親はクリスチャンで、週末には山崎と弟と教会へ通っていた。^{★12}

家業の映画館を手伝う影響で、高校時代の山崎はオーディオとカメラに興味を持ち、高校卒業後は高知県を離れ、大阪にて写真現像の仕事に就いた。しかし、1 日中暗室に籠り、日光にあたらぬ生活が続くと心身共に疲弊してしまい、3 ヶ月ほどで退職することとなった。^{★3} ちょうどその頃、山崎のもとへ父親が仕事のついでに立ち寄り、たわいもない会話をしていた際、不意に「実はお前の母さんは、お前を産んだ母親ではないんじゃないか」^{★4} と伝えた。のちに山崎は、その時のショックを「私の心は石のように黙ったままであった」と語っていた。^{★5}

仕事に挫折し、自らの出生についても疑問を持ち、鬱々としたものを抱えた 10 代終盤の山崎は、地元に戻り何をするわけでもない時間を過ごした。元来かなりの読書家であったが、本すら読む気にもなれない日々を送っていた。そんなある日、ふと聖書のことが頭をよぎり、押し入れから取り出し、ページをめくった。3 ヶ月ほどかけて目を通していく中で「テサロニケ人への第 1 の手紙 5 章」に行きあたり、山崎はその内容に目の覚めるような感動を覚え、涙を流し、それまで囚われていた暗い感情を拭い去ることができた。20 歳になったばかりの時だった。^{★6}

同じ頃に知人から、香川県に新しくできた大学があるから、入学してみてはどうか？ と打診があった。山崎は学費の工面が難しく進学を諦めていたが、新設されたばかりの四国学院短期大学はキリスト教伝道のため入学金及び授業料を免除、寄付金から賄う制度があり、それを利用し入学した。

1962 年、大学 2 年目の春に、盲人である松浦茂晴が教員として起任した。山崎は目の見えない松浦の本読みの手伝いや、研修や旅行にヘルパーとして同行した。山崎と松浦の親交はその後、山崎が卒業し、住む場所が変わった後も続き、松浦が亡くなるまでの 23 年間途切れることはなかった。^{★7,8}

2 年間の短大生生活を終えた山崎は、その後同大学の 4 年制へ編入した。3 年生の秋に精神科医の神谷美恵子の集中講義を受講し、受講の後に神谷のもとを訪ねた。その際に交わされた会話を、山崎は生涯忘れることはなく、神谷を恩師として慕った。のちに自ら開業した出版社より神谷美恵子著作の書籍を 4 冊出版することになった。^{★9}

同じく 3 年生の時、山崎はかねてからの親友の久保紘章と仲間内の詩や文章を集めた同人誌「足跡」を作り始めた。

四国学院大学を卒業した山崎は 26 歳から京都に移り住み、京都大学へ通い聴講生として様々な講義を聴講した。この頃より西洋哲学への興味が深まり、主にはニーチェを研究するようになった。当時は、山科区にある随心院へ住み込み、境内の手入れなど様々な下働きをしながら暮らしを立てていた。

そして 1969 年、松浦茂晴のアメリカマサチューセッツ州にあるボストン大学への訪問に 1 ヶ月間、同行することになった。^{★10} その際、旅立つ前にと少し急ぎ、予てから交際していた、同郷の幼馴染である照恵（旧姓：小川）と入籍した。



当時読んだ聖書現物
2023 年 11 月 art space co-jin 撮影



松浦茂晴と山崎、ヴァーモント州立大学にて
1974 年 4 月



山崎と神谷美恵子、神谷自宅にて久保紘章撮影

同年、当時関西学院大学大学院へ通っていた久保氏と再び同人誌を作成し、そのタイトルをフランス語で「まなざし」の意味をもつ「Regard（ルガル）」とした。

京都大学にて学び、聴講を重ねていた山崎は、その後同志社大学大学院神学部へ入学した。住まいを伏見区向島の小さなアパートへ移し、照恵と慎ましく暮らし、1970年に長男を1973年に長女を授かった。

同志社大学大学院在学中の1971年5月のある日、山崎は精神医学や心理学の研究をしていたことから現場での学びを求め、知人の看護師を頼りに京都府立洛南病院を訪問し、精神疾患の治療を受けている方々と交流した。その際に、当時の院長と話をする機会があり、そこで山崎は「彼らには何か表現をする時間が必要なのではないか」と持ちかけた。院長より「それでは君は何かできるか?」と問われ、家業の映画館で看板の絵を描いていた経験から「絵ならばお世話ができる」と伝えたところ、院長はすぐさま館内放送で患者たちへ絵画教室への参加を募るアナウンスをし、翌週から絵画教室が開催される運びとなった。当時31歳の山崎の生活は、自宅で開業した学習塾ルガルアカデミーの収入と保育士である照恵の支えで賄っていた。

1972年に同志社大学大学院を修了し、同年に出版社ルガル社を開業、ある少女が書き溜めた詩を久保が編集した『天の鐘 心を病める少女のノート』の出版を果たした。

塾と出版社の運営をしながら、毎週金曜日には必ず洛南病院へ出向き絵画教室の講師を務めた。絵画教室が始まってから10年目の1981年、京都市内の画廊と一べえにて「心象展」を開催することとなった。そして1996年、山崎は絵画教室開始から25年の時に、『画集 心象の世界』をルガル社から出版した。2013年、山崎73歳の時、42年間務めた洛南病院絵画教室講師を辞した。

絵画教室を務めていた当時、山崎はよく「いつか障害を持った人の作品を集めた美術館が創られたら素晴らしい」と話しており、2001年に京都新聞「十字路」に寄せた文章でも「何らかの助けが与えられて、いつか京都のどこかに小さな美術館を建てるのが私たちの夢である」^{★11}と綴っていた。

2021年8月下旬に肝臓癌のため80歳で山崎はこの世を去った。体調に異変を感じてからほどなく、短い闘病期間だった。



結婚式、園田教会にて1969年7月



ルガルアカデミー看板
2023年11月 art space co-jin 撮影



晩年の山崎（お孫さんよりバレンタインに、
カメラの形をしたパッケージのチョコレート进行う）
2021年2月

2 | 洛南病院 絵画教室について

1971年から始まった洛南病院絵画教室は、木造の古い建物で「レクセンター」と呼ばれる場所で始まった。レクセンターとは、もともとは給食棟だった建物を1960年頃に改装しワンフロアにした建物だ。毎週金曜日の午前中、机の上に画用紙や画版、クレパスなどの画材を並べ、患者さんたちを待つ。参加は自由で人数にはバラつきがあったが、だいたい4、5人が集まっていた。参加した患者さんは思い思いの画材を手にとり、ゆっくりと描く人、インスピレーションのままに力一杯描く人など様々だった。講師やスタッフは、特に積極的な指導はせず、問われれば返す形で「見守る」という関わり方が主体だった。また出来上がった作品には、第三者的な心理判定や分析もしくは恣意的な判断を避け、作者自身の想いを知らせてもらうこと、自由に表現をしてもらうことを心がけていた。参加する患者さんは、長く入院をしている人や入退院を繰り返している人など様々であったが、絵画教室はそれぞれの心のうちを否定されることのない場所として保証されていた。